

敬語法の研究

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

山田国語学入門選書 4 山田孝雄著 敬語法の研究 書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

敬語法の研究 目次

第一章 総論	12
--------	----

第二章 敬語法の大綱	17
------------	----

第三章 口語の敬語法	23
------------	----

第一節 単語に於ける敬語 23

第一項 敬意の接辞 23

第二項 体言の敬語 28

第三項 形容詞の敬語 30

第四項 敬意の複語尾 32

第五項 動詞の敬語 35

第六項 存在詞の敬語 44

第七項 補助動詞「まづ」 48

第八項 副詞の敬語 51

第二節 連語に於ける敬語 51

第一項 補助動詞「ます」の用法 51

第二項 資格の敬語 62

第一目 「する」の資格の敬語 63

第二目 「する」に準ずる敬語動詞の資格 66

第三目 「つぎる」「いぢります」「つらつしやる」の資格 75

第四目 「です」の資格 76

第五目 「なり」「な」の資格の敬語 83

第三項 補格の敬語 84

第一目 動詞と補格との合体によりて成立つ敬語 86

第二目 賓格又は補格をなす敬語動詞の補格 89

第四項 連体格の敬語 91

第五項 修飾格の敬語 92

第三節 句の組織に於ける敬語 93

第一項 述格の態度に関してあらはるる敬語 93

第一目 説明体の句の述格の敬語 93

第二目 疑問体の句の述格の敬語 99

第三目 命令体の句の述格の敬語 101

第二項 称格の区別によりてあらはるる敬語 109

第一目 謙称を用ゐる場合 111

第一款 第一人称に於ける謙称 111

第二款 第三人称に於ける謙称 117

第二目 敬称を用ゐる場合 124

第一款 第二人称に於ける敬称 125

第二款 第三人称に於ける敬称 133

第三項 複文中の敬語 140

第四節 敬語の特別の用法 145

第四章 候文の敬語法.....

第一節 単語に於ける敬語 149

第一項 敬意の接辞 149

第二項 体言の敬語 155

第三項 形容詞の敬語 160

第四項 敬意の複語尾 161

第二節

第五項 動詞の敬語 166
第六項 存在詞の敬語 178
第七項 副詞の敬語 186
連語に於ける敬語 187

第三節

第一項 補助動詞の性質を有する敬語の用法 187
第二項 賓格の敬語 200
 第一目 「す」に准ずる敬語用言の賓格 200
 第二目 「あり」及び「あり」に准ずる敬語用言の賓格 213
第三項 補格の敬語 219
 第一目 用言と補格との合体によりて成立つ敬語 219
 第二目 賓格又は補格をなす敬語動詞の補格 220
第四項 連体格の敬語 225
第五項 修飾格の敬語 228
句の組織に於ける敬語 229

第一項 述格の態度に関してあらはるる敬語 229
 第一目 説明体の句の述格の敬語 229
 第二目 疑問体の句の述格の敬語 236
 第三目 命令体の句の述格の敬語 239
第二項 称格の区別によりてあらはるる敬語 239
 第一目 謙称を用ゐる場合 240
 第一款 第一人称に於ける謙称 240
 第二款 第三人称に於ける謙称 244
 第二目 敬称を用ゐる場合 248
 第一款 第二人称に於ける敬称 248
 第二款 第三人称に於ける敬称 251
第三項 複文中の敬語 256

第五章 普通文の敬語法

第一節 単語に於ける敬語 263

第一項 敬意の接辞 263

第二項 体言の敬語 265

第三項 形容詞の敬語 266

第四項 敬意の複語尾 267

第五項 動詞の敬語 271

第六項 存在詞の敬語 280

第七項 副詞の敬語 282

第二節 連語に於ける敬語 283

第一項 補助動詞の性質を有する敬語の用法 283

第二項 賓格の敬語 288

第三項 補格の敬語 291

第四項 連体格及び修飾格の敬語 292

第三節 句の組織に於ける敬語 292

第一項 述格の態度に関してあらはるる敬語 292

第二項 説明体の句の述格の敬語 293

第三項 疑問体の句の述格の敬語 296

第四項 命令体の句の述格の敬語 298

第五項 称格の区別によりてあらはるる敬語 300

第六項 謙称を用ゐる場合 300

第七項 敬称を用ゐる場合 302

第八項 複文中の敬語 309

第六章 結論

凡例

一、本書の底本は、山田孝雄著『敬語法の研究（訂正版）』（一九三一年六月二〇日訂正版発行、宝文館刊）である。

一、底本の漢字は旧字体であるが、これは新字体に置き換えた。

一、仮名遣い、送り仮名は底本のままである。現今一般的でなくなった漢字遣い（例えば「著ける」「到著」）もそのままにした。ルビ（振り仮名）も底本のままであるが、若年層読者には難読かとも思われるごく一部のものには、底本で使われていない山括弧へゝで括ることにより底本のルビと区別して、その読み仮名を示した（但しこれは便宜的なもので、例えば「加之」の場合、これは「しかのみならず」とも「のみならず」とも読まれてきたものである）。底本における表記の正誤を判断しかねる場合や誤りを正しかねる場合、あるいはあえて訂正するまでもなからう場合に、底本原文のままの意味で附する「ママ」のルビは、丸括弧で括り「（ママ）」と表記した。踊り字の用法も底本の通りとした。「縛礼／褥礼」「準ず／准ず」のような表記ゆれもそのままに表記した。

一、原本の傍線記入（傍線の範囲や傍線同士の区切り箇所）が、当該項目の主論点となっている単一の規準に適っておらず明らかに不適切といえるものについては、これを修正した。傍線記入の乱れが二通り以上の規準において生じている場合は、何れの規準を優先すべきか判断しがたいので修正は施さず、「（この部分の傍線は原本のまゝに附したままに）」のような註記を添えた。

敬
語
法
の
研
究

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序

わが敬語法の研究はその一端を日本文法講義及び日本口語法講義に掲げたり。然れども、これが研究は普通の文法とは稍趣を異にせるを以て巻を別にして説くを必要とせり。この故に之を著はさむと決心し、さきに之を世に約せり。然るに其の用例を世人の文章より求むるが為に多くの時日を費し、荏苒今日に及べり。時偶かの大震災に遭ひぬ。余が寓は幸にして被害輕微なりしかども、かの大火災について起りし流言蜚語はいたく不安を感じしめぬ。ここに於いて熟惟ふに一朝の変あらむか、拾数年にわたりて苦心經營せる著述の原稿は一人二人の力にて動しうべくもあらねば、自然の勢に委するの外なし。ただ失ふべからざるは重要な家門の文書と友人より依託せられたる論文の稿本と某博士より借りたる天下唯一の書となり。この三者はわが生命を以て保護せざるべからざる責任あるを以てこれを提籃の中に収めたり。然るにそこになほ余地ありしを以てそれに収めたるは実にこの研究の稿本なりとす。かくて、余が身を離さざること十余日。物情稍定まりし後靜に思ふにこの敬語法の研究は一時実に余が生命を以て保護せるものなるを以て永久これを記念せむと欲し、当時莫大の損害をうけて善後に日もこれ足らざる宝文館主大葉久吉氏を訪ひて事情の容す限り近き時期に於いてこれを刊行せむことを求めしに快諾を得たり。即ち忽劇の間にその実例を補ひて之を宝文館主に託して剞劂に委ぬることとせり。顧みれば余が半生を烏有に歸せしむるを致し方なしと覺悟せし著述の稿本の幸にして完きを得たるは実に天祐といはざるべからず。余はこの天祐を深く感謝すると共に當時の記念として本書を公にすることはせるなり。ここに顛末を記して序に代ふ。

大正十二年十一月三日

山田孝雄識

再版に題す

本書を刊行して七年。顧みれば、この稿を完成せしは彼の大震災火災の直後光景慘憺人心恟々たる境裡に在りき。而して印刷能力、出版材料の欠乏せる当時の東京を記念する一種の資料として本書はかぞへらるべきものと思はる。当時の余としては一はこれによりて、わが発行者宝文館の復活の機運を助長する一要素とも成らばやと思惟するにありき。爾来帝都も宝文館も旧にまさる勢を以て復活し、今の隆盛を来せり。今この再版を世に送るに当りて感慨無量なり。ただ憾むらくは、本書の序に述べし大槻博士が今や白玉楼中に在りて、親しく当時の追憶を告ぐることを得ざることなり。然れども、同じく序文に述べし論文の本主は今盛んに世に活躍し、道を談じ学を論ずる樂を共にすることを得るを幸とす。ここに往時をしのび、現時を感じて一言す。

今この再版に際して多少の誤謬を訂正せり。これは文学士山本信道氏の好意による。

昭和六年五月十七日

山田孝雄

SAMPLE
Shoshi-Shops.com

第一章 総論

敬語は實際上に用ゐる言語の一形式にして、国語にのみ存する現象にあらず。然れども国語の如く敬語の發達せる言語は世界に比類なかるべし。さればかのチャムバレン氏は曰はく「世の如何なる言語といへども日本語より多くの敬語を有するものなし」と。これ氏が言語字上の見地より出でたる公平の言にして博く世界の言語を知り、兼ねて国語に対しての真の了解ある人ならではかく断言するを得べからざるなり。

凡そ敬語の發するはもと社交の間にあり。敬語は実に人々相推讓する意を表明する一の方法なり。もとよりこの敬語は上下貴賤の區別をあらはすに適すといへども必ずしも階級制度の結果とのみいふべからず。人は人として相交る間に互にその人格を重んじ、その才能知識、徳望、品格等を尊ぶに於いて、それを言語によりて表明することこれ実に自然の人情にしてその存するはこれわが民族間に推讓の美風の行はるるによるものなれば、寧ろ嘉みすべき事なりとす。

チャムバレン氏又曰はく「他を尊び自ら謙るは常に日本人の心頭を去らざる所なり」と。凡そ人は人と交る時先づ己が感情を平にして他の感情を和ぐるを以て交際の要諦とすべきものなれば、それを言語にあらはすべき形式の存するは当然の事といふべきなり。

抑も敬語は礼儀の自然に言語の上にあらはれたるものなり。即ち長上に関する事物動作には特別に尊敬したる語を用ゐ、又之に対して自己の事物動作には謙遜したる語を用ゐることこれ敬語の基づく所なり。

かくの如く同一の事物動作をいひあらはすに差等ある言語を用ゐることは上古より既に存したることにして今

総論

に伝はれる文献にその証存し、中古に至りてはその現象漸く繁くなれり。近古を経て近世に至りては社会の狀態一変し主従の關係益々複雑になると共に敬語も亦愈々甚しく発達したり。しかるに明治時代に至りて一般の旧儀の廢れたるもの多くしてかの繁文褥礼は漸く減じたるを以て外形上敬語の上にも大なる変化を呈せり。しかれども敬語そのものは決して減ぶることなくして、盛に用ゐらる。

現今の言語文章に於いての敬語の状況を見るに普通の文章には著しく敬語を減じたりといへども、書簡に用ゐる候文にてはなほ甚しく盛に用ゐられ、口語に於いても亦特別の発達をなせるを見る。

世人は普通に敬語といふによりて往々尊崇の意をあらはすに限るもののやうに心得るものなきにあらず。然れども、そは一を知りて未だ二を知らざるものなり。我等が用ゐる敬語は必ずしも尊崇に限らず、親愛の意をあらはす場合あり、又言語に品格あらしめむが為に用ゐることあり。敬語に関してかつて、博士森林太郎氏がその訳せるイブセンのノラの中にノラの夫がクログスタットに謂ふ詞として「わたしは君にお帰なさいと云はなくてはならぬ」といへるに對して或る評者が「お帰なさい」は丁寧にすぎることによつて「帰れ」といふべしといへるに對して次の如くいへることあり。

併し私の「お帰なさい」と書いたのはノラの夫がクログスタットを尊敬してゐていふ敬語でない。ノラの夫が自ら尊敬して言ふ敬語である。日本語には自家の紳士的地位のために賤しむべきものに對しても使ふ敬語がある。どうもノルエイ語に通じてゐる評者には日本語に對する理解が乏しいやうに思はれてならない。

これ一方には外国語のみを知りて日本語を知らず、しかも國語に對して漫に論議を逞しくする徒に對しての頂門の一針たると共に邦人にして敬語の真相を知らずして濫用する徒に對しての好個の教訓といふべし。実に吾人の國語に存する敬語は單に他人に對して敬意をあらはすに止まらず。それと同時に自己の品格を維持するをも目的とするものなり。即ち若し之を用ゐぬ場合には或は野卑に聞え或は傲慢に見ゆるが故に自ら敬ひ自ら重んずるの士、はた品位をおとさざらむと欲する人、上流の人は上下に通じて敬語を用ゐることを忘れざるなり。

人或いはむ。敬語は専制時代の階級制度を背景として発達したるものにして、自由平等の新時代には排斥すべきなりと。これ亦皮相の^{まへ}見にして全く敬語の真意を知らざる徒の言のみ。もとより階級制度の著しかりし時代にはそれを背景として敬語が異常に発達したりしは疑ふべからずといへども、それも実はただ形式的に繁文褥礼となりたるのみにして、その繁雜なる形式は明治維新以後社会の狀態の改まると共に漸くにすたり、今やその古の繁文褥礼を知るもの殆どなくなりたるにあらずや。しかも敬語はなほ依然として一定の方式を以て行はれてあるのみならず、口語の敬語法の如きはかへりて候文の敬語法よりも實質上進歩し発達せる處あること本書に説く所の如きにあらずや。されば吾人はいふ。敬語は明治維新以後かへりて活潑の生命を得て復活せりと。そのかくいふ所以はかの万葉集及びその以前の文献に伝ふる敬語の現象と現代の口語の現象とが共に活力に富み生氣に満ちて、一道の氣脈相通するものあるにかかはらず、候文乃至中古の雅文の敬語には形式の整へる点はありとしても生氣乏しかりしを以てなり。されば吾人は現代を以て敬語の衰期と目することなくかへりて復古更新の盛時なりと目するものなり。かの敬語の衰滅を説くが如きは全然國語を知らざる徒の妄言のみ。

之を要するに敬語は人の性情に根ざして起れるものにして、社交の礼節作法と揆を一にするものなれば、人間の社会に必然に存すべきものなり。而して一の國語に存する敬語の変遷は外、社会の状況によりて多少の消長を呈すべきは勿論なれど、その根柢は國民の性情に存して、容易に変化せしめ得べきものにあらず。今若し、すべての礼節作法といふものに全く跡を絶つに至ることあらば、その時或は敬語といふもの全く世に存せざるに至らむ。更に又わが國民が礼節を重んじ、自ら敬ひ、自ら重んずる美風の全く存せざるに至らば、わが國語に於ける敬語は地を掃ふに至らむ。然れどもかくの如きは望むべき事にもあらざると共に、望みても行はるべきにあらざるなり。

敬語はかく社交上に大なる關係あるものなれば、これを用ゐるには正鵠を失はざるやうに心がけざるべからず。而して之を正しく用ゐむことは談話又は文章の上に最も注意すべきことなれば、従来文章の作法を説きたる書に之を論ぜざるもの殆どなしといひて可なり。

作文上よりすれば、敬語の用法に一定の法則ありとするも又無しとするも、大なる關係なきが如くに思はれむ。

総 論

然れども一定の法則を知らずしてただ用法を臚列するに止まる時はその誤りを正す場合に法則によりて合理的に指摘すること難し。著者かつて奇なる事柄に遭遇せり。著者がかつて任務に就ける某省内にての事なるが、某といふ属官一軸の懸幅を携へ来りて世に名高き某博士に一閱を請ひたり。その時の言に曰はく「先生どうか、これを御拝見を願ひます」博士この言に驚かれたる状なりしが、や、久しくして頭を撫して「御拝見ですか、まあ、しかし拝見しませう」といひて之に対して指教せらるゝを見たり。かくてその属官は揚々として来り得々として辞し去れり。ああこれ一場の滑稽として一笑に附し去るべき事ならむや。一国の文教の中心として天下に号令する官吏の間に於て極めて卑近なる一敬語の用法をだに知らざるにあらずや。或は又他人に対して「御消光遊ばされ云々」といひたる人あるを見る。これ亦甚しき事実にあらずや。かくの如くにして敬語に自らいふものと他をいふものととの區別あるを忘れただ用ゐれば即ち敬ふなりと思ふが如きは真に濟度すべからざることにあらずや。今にして敬語の真意を明にしその用法を正すにあらずば、わが国は真に礼なく節なき野蛮の境と化し去らむ。而してそのかくの如き非儀の行はるるは即ち敬語の正しき用法を知らざるによるなり。

凡そ敬語は正しく用ゐざるべからず。漫りに敬語を用ゐて他人の悪感を買ふことあらんよりは寧ろ用ゐざるに如かず。これを用ゐること不足なれば礼を失ひ、過ぐれば輕侮の意を生ず。之を正しく用ゐる時はその人品高尚にも優雅にも見え、之を過つ時はその品格劣等に見ゆるのみならず惡意なしと認めらるる時も或は滑稽を演じ或は嘲笑の的となるべく、若し惡意ありと認めらるる時は或は侮辱と思はれ或は憎惡と思はれ、或は諂諛と思はるるに至らむ。一の敬語の用法の当否の及ぼす所頗る大なるものあるを忘るべからず。實にこの事まさに礼儀作法の当否と趣を一にすることあるを知るべし。

敬語はわが国人にも往々正しき用法を認められぬものあること上の例を見て知るべし。而して西洋人等がわが国語を学ぶに最も困む点の一は實に敬語なりといふ。

敬語の用法は上の如く困難なるものなりや。諸君少しく顧みよ。われらの平常の極めて打ちとけたる場合の口語にありてはその未成年の小兒はた白痴ならざる限り、敬語の誤用あること殆ど之をきくことなくして、書簡文又は

漢語などを使用する時に限りてかく誤用のあらはるるは何によるとすべきか。これらの現象を見て、短視者流はこれ漢語を用ゐる弊なりとせむ。然れどもこれ亦皮相の言のみ。わが国語の敬語に一定の法則ありて、しらずく平常の語にては之を体認するが故に誤ることなきものなるが、その知識正確ならざるが故に、一旦漢語その他を用ゐて、改まりたる口上をなさむとする時に之を処理する所以を知らざるによるなり。而して西洋人等をはじめよりこの法則を知らず、国人の之を彼等に伝ふるもの亦之を法則によりて説明する方途を知らず、漫に実例を臚列するに止まる。これを以て之をきく人之を了会する方途に困み、五里霧中に彷徨するに止まる。これ西洋人をして国語の敬語を最も難解なりと叫ばしむる原因なり。

今若しこれが法則の存するを知らざる徒ありて敬語を用ゐるを難ずることあらば、余はただそれらは己が無智を掩はむが為に国語を罵るものと認めむ。而も、それらの徒は実に国語の賊たるのみ。

従来の作文の書に於ける如き敬語の臚列はその法則を明にする方途にあらず。苟くも言語の法則といふ以上はこれを文法上の法則として説くにあらずばあらず。惟ふに従来口語法を論ずる学者大抵この敬語に論及して敬語法といふものを説けり。されどもその述ぶる所は果して法則と名づけらるべきか。その状を見るに単に事実又実例の分類又は臚列に止まり、その間に法則らしきものを説きたるものなし。かくの如くにして敬語法を説くといふを得べきか。名の実に副はざること甚しといふべきにあらずや。

著者思をこれに潜むること多年、終に敬語にも一定の文法上の法則あることを発見しぬ。これよりして後数年往々その一端を先輩知友に述ぶることありしかど、未だ、之を世に公に発表することなかりき。然るに日本大学の請に応じて国語の法則を講ずるときはじめてその説を公にし、その大要を日本文法講義に略叙したり。次いで日本口語法講義をあらはすやその口語に於ける法則を稍委しく述べたり。しかれども前二著に説けるは真に梗概に止まる。而してこの事殆ど全く先人未発の言なれば、委曲を知らむと欲する士に対しては別に之に専らなる書を著すの必要を感じたり。こゝに本書を著して敬語の法則の厳然として存することを明にし、一は皮相の論者をして反省せしめ、一は世人をして、真の法則を知らしめて誤用の弊なからしめむことを希ふ料とす。

第二章 敬語法の大綱

こゝに敬語法といへるものは文法上に於ける敬語の法則といふ義にして、漫に意義用法によりて敬語を分類臚列して之を法則とするものにあらず。読者先づ之を諒せよ。

抑も、^{全ても}文法上に於ける敬語の位置を説けるものは恐らくは著者を以て嚆矢とすべし。これより先かのチャムバレン氏は、

—— 又精密なる敬語あり。此法は或る程度まで動詞に於ける人称に代りて人称代名詞無きも差支なからしむるものなり。

といへり。これ実に敬語の性質を知れるものの言にして、著者のこの研究は或は冥々裡にこれらの言に促されたりしものならむも知らず。(著者之を読みし時は未だ敬語の法則を研究する志あらず。しかも、研究中にはチャムバレン氏の語は全く忘れてありしなり。されど、一度印象をうけしことは消ゆるものにあらねば、これが基となりて、後年解決したりしものなるべきか。)然れどもこの言そのままにて採用せらるべきにあらず。

入江祝衛氏は国語につきて一隻眼を具する士なり。その言に曰はく、

—— 国語の敬語は其本然の任務以外に主語の何たるやを指示することあり。例へば御尤もです。

—— といふ時は別に

那方は御尤もです。

—— といはざるも、其意明（あきらか）なるが如し。

といへり。これ亦頗る敬語の性質を解せるものなり。然れどもこれにて敬語の法則立ちたりとはいふべからず。入江氏は又上のチャムバレンの言を評して曰はく、

— 然れども国語の動詞に人称ありとはいふべからず。是れ畢竟敬語法より起る偶然の結果たるにすぎざるなり。

と。この言、一面の真理を含めりといへども、未だ尽さざるなり。国語の動詞に人称なきことは勿論なるが人称の代りをなすことは敬語法の偶然の結果なりとはいふべからず。これ即ち敬語法に伴うて起る当然の現象なりといふべきものなり。

抑も敬語は主として体言用言に存するはいふまでもなきことなるが、それら単語に存するを説き、又その形体を論ずといふとも未だこれを以て敬語法とは称すべからざるなり。既に敬語法といふ以上はそれら単語にあらはるる現象を説くべきはもとよりなれど、それが、語法上如何なる地位を占め、如何なる用法又は組織をとれるか又それが、普通の文法と差別ありや否やを明にせずばあるべからず。

敬語にも古来の変遷あり。現代の語にも口語と候文と普通文とによりて各（それぞれ）用語とその用法とを異にする点あり。今本書には主として現代の文につきて論ずべきが、それにつきて上述の三体各（それぞれ）趣を異にするものあるを以て詳細は三章に分ちて述ぶることとし、本章に於いて一般に通ずる大綱を論ずべし。

敬語の存するは品詞にては主として名詞及び用言にあらはるものなるが、稀には数詞副詞にもあらはるることあり。而してこれらが運用せらるるには、実に西洋文典の称格に似たる用をなすものなり。

称格とは西洋文典の person の訳語にして之を分ちて第一人称 first person 第二人称 second person 第三人称 third person の三とす。第一人称は話者自身をさし、第二人称は対者をさし、第三人称は話題に上れる一切の事物をさすなり。

敬語法の大綱

さてこの称格といふものは言語ある以上は必ず存すべき事項にして甲の国語にありて乙の国語になしなどいふべき性質のものにあらず。たとへば人名の如きも、山田といふものが、手紙をさし出して自署する時はこれ第一人称なり、他より山田に宛てたる時宛名の山田は第二人称なり、又その手紙中に山田の事を述べてある場合には第三人称なり。この故に名詞にも称格あるは明白の事なり。然るに従来の文法家之を説かざりしは如何。これ文法上さまで必要なしと認めたるによるか、若くは文法上その区別をなす由なしと認めたるによるものなるべし。然れども、談話演説書簡等には常にこの区別をなす必要ありて、世人は文法家の教を待たずして明に区別し来れるなり。さて又西洋文法上の所謂称格は名詞以外、代名詞、動詞等にも一致すべき文法上の必要ありて之が研究は又甚（くはげ）なること、せられたり。わが動詞には称格によりて語形の変化あることなきが如くなるによりてこの点より見て又必要なきが如く見ゆ。然るにこゝに従来の文法研究に於いて殆ど全く放擲せられたる如くに見えてしかも称格上の問題として国語独特の現象と認められたる敬語あり。

敬語は実に称格に關聯するものにしてそれが、称格に關聯する点より見て敬称と謙称との二に大別するなり。

謙称は他に對して謙遜する意をあらはす語にして主として第一人称に立てる者が自己をさし又は自己に附屬するものをさしていふに用ゐるなり。

従来この謙称を文法書に説けるもの二三なきにあらずといへども、その説く所ただ意義のみに止まりて文法上の位置を指定するものを見ざりき。余は種々に之を研究したる結果口語及び候文に於いてはその第一人称及び第一人称の主格が使用する語に限るものなるを明にするを得たり。

敬称とは對者又は第三者に關する者をさして尊敬の意をあらはすものにして第二人称又第三人称をいふに用ゐるものなり。

名詞の敬称にありては更に之を対称の敬称と一般の敬称との二に別つ。

対称の敬称とは第二人称に立てる者をさし、又その第二人称者に附屬連關するものをさす時に尊敬する意をあらはす語なり。

従来謙語と敬語との区別をなせるものもその狭義の敬語中に更に区別すべきを唱へたるもの殆どなく況んやそれが文法上の位置を説けるもの全くなし。ここに対称の敬称といへるものは第二人称をさし、又は第二人称者に対してそれに附属関聯するものをさす場合に限るものにしてこの区別は書翰文の上には明に区別せらるべき性質をあらはせり。

対称の敬称は対者に関してのみ用ゐるものにして一般の敬称には流用するを得ざるを本質とす。而してこれらは候文には最もよく発達せるものなればこの区別は候文にては甚だ必要なりとす。

一般の敬称は主として第三人称に用ゐらるるものにして場合によつては対者の敬称に流用せらるることあるものなり。

この一般の敬称といふものには従来文法書等に説ける敬語のうち、上の謙称及び対称の敬称以外のすべての属するものなり。なほこの敬語中には尊敬と曰ふよりは上品又は丁寧にいふを主とするものもあることは総論にいへる所なり。

この敬称と対称の敬称との区別はその名詞の用法上の区別に於いて必要なるが、その他の場合には、之を一括して敬称とするなり。この一括したる敬称は動詞の敬称と用法上の一致を要するものなれば文法上重要な区別なることを忘るべからず。以上、敬語の区別につきては名詞のみならばかくの如き区別をなす必要殆どなきが如くなれども、これが用言等に関聯する点又章句の組織の上に関係深さを考ふるときはこの区別は文法上なほ重要なことをさとるべし。

用言の敬語も亦 ^{へま}謙称と敬称とに分つ。謙称は動詞、存在詞に存し、口語には稀に形容詞にもあり、敬称はすべての用言に存す。

用言に於ける謙称は之をあらはす特別の語、たとへば、「申す」「在る」「候ふ」「ます」等にてあらはすなり。而して形容詞の謙称は口語に一二存するのみなり。

用言の敬称は之をあらはす特別の語を以てするものあり。敬意の複語尾を添へてあらはすあり。又敬意の接頭辞

敬語法の大綱

を加へてあらはすあり。形容詞の敬称は接頭辞を加へてあらはす。たとへば「お。い。た。は。し。い。事。で。あ。り。ま。す」の如きこれなり。動詞存在詞は「遊ばす」「給ふ」の如く特別の語を以てするあり。「行かる」「行かしめ給ふ」「ならせらる」の如く複語尾を添ふるあり。「お聞及び」「お出かけ」などの如く接頭辞を加ふるあり。

敬語は以上の外代名詞にもあることあり、副詞にもあることあり。その詳細は各説の条に説くべし。

以上単語にあらはるる敬語のみにては未だ以て敬語に一定の法則ありと認むるに足らず。これらの敬語が、文章語句の中にありて用ゐらるときに一定の規律存す。この規律即ち敬語法の骨子にしてこの法則あるが為に単語なる敬語の上にも種々の区別を施すべき必要あるなり。次にその法則の主要を説くべし。

動詞の敬語のあるものはそれが単独の動詞として用ゐらるる外に「す」といふ語と同じ性質をあらはし、他の語を資格として伴ひ相合して一の語たる資格をあらはし、よりて以て敬語の用を完うするものあり。「あり」といふ存在詞も亦^金資格を伴ひて相合して一の敬語をなすことあり。又ある敬語動詞が「あり」の性質をあらはして資格を伴ひて相合して一の敬語たる用をなすものあり。或は又単語としては敬語にあらぬものが、補格をとり、それと合体してはじめて敬語となるものあり。而してこれらにつきてはその語に制限あり、その成立に一定の法則あり。連語としての敬語の法則の研究ここに於いてか必要あるを見る。

更に進みて句の組織に入らむか。敬語は実に句の称格の区別に大なる関係の存するを認むべし。その大綱をいへば即ち第一人称の句にては謙称を用ゐ、第二人称の句にては対称の敬称を用ゐ、第三人称の句にては一般の敬称を用ゐるを原則とす。

ここにいへることは敬語を用ゐる際の事をいへるものなれば、敬語を用ゐざる句に対しては何等関係のなき事なりとす。

第一人称の句の敬語には述格に謙称の用言を用ゐる。その句中の第一人称及び之に関するものには謙称の名詞又は用言を用ゐ、第二人称第三人称に関するものには敬称を用ゐることあり。

第二人称の句の敬語には述格に敬称の用言又は敬意の複語尾若くは^{かし}それらの動詞に更に謙称の動詞を加ふることあり。

とあり。而してこの句中の主格呼格を対称の敬称にてあらはすことあり。又その句中の他の各称格に関する敬語は第一人称の句に同じ。

第三人称の句の敬語には二様の状態あり。一はその主格を尊敬していふときにあらはるるものにして、その述格及び句中にあらはるる称格につきては第二人称の句の敬語におなじ。

第三人称の句の敬語の他の一種は、その主格に特に尊敬の意を加ふることなき場合にしてその述格を第一人称の句の如く謙称の動詞を用ゐる。この際句中に第一人称のあらはるる場合に往々謙称を用ゐる。これらは従来の文法家には丁寧にいふものとせられたり。

総じて従来の文法家敬語につきてはただ単語をしかも、その意義を説くに止まりて之が句又は文中に使用せらるる法則を説かずしてしかも敬語法といふことを喋々せり。されど、それらの諸家の説ける所にいかなる法則の存せるか。実に敬語法といふ以上そこに一定の法則なからずばあるべからず。本章に説く所はその大綱を提ぐるに止まる。その詳細は各説に至りて明にすべし。

第三章 口語の敬語法

現代の口語に於ける敬語は外見上或は秩序なきが如くに考へらるれども、之を精査するに、実に井然たる法則の存するを見る。而して敬語の極めて発達してある如くに世人に思惟せられてある候文の如きは口語の敬語に比してはかへりて不具なる点少からず。更に溯りて近世以前の敬語の現象に比較するに、現代の口語の方かへりて合理的に発達せるを見るべし。更にその本章の末に論ずる特別の用法の如きに至りては実に万葉集及びその以前の語法に類一の現象を発見しうるに止まるものにして敬語の真生命は實にかくの如き現象によりてはじめて明に識認せらるるといふべき程の現象なりとす。之を要するに口語の敬語法の研究は口語に於ける研究に基礎を求めずばあるべからざるなり。この故にこの書、又各説の首章として口語を説くこととせり。

第一節 単語に於ける敬語

単語としての敬語には本来より敬意を有する語あり。又然らぬものに接辞を加ふるによりて敬語となるあり。この故に先づ、接辞にして敬語を構成する力あるものを一括して次に説くべし。

第一項 敬意の接辞

接辞には接頭辞接尾辞の二種あり。而して敬意をあらはすものも接頭辞接尾辞の二種に存す。

一、接頭辞にして敬意をあらはすものは次の数種なり。

「お」 名詞の上に冠することあり。

お友達	お顔	お年	お名前
お宮	お寺	お屋敷	お宅
お盆	お火鉢	お金	お札
お米	お肴	お乳	お薬
お手紙	お話	お願	お役
お正月	お年玉	おそなへ	お誂ひ
お世話	お暇乞	お守り	お気に入り

これには動詞、存在詞の連用形を名詞に準じたるものに冠したるものあり。

お出になりました。
 ありなさい。
 認めあそばせ。

又数詞の上に冠することあり。

一 お五つ おいくつ おいくら

又形容詞の上に冠することあり。

お早う。	おいたはしや。
お久しうございます。	おうつくしい。
お早いおつきでございます。	
お近しい方でございます。	

副詞の上に冠することあり。

SAMPLE
 Shoshi-Shinsui.com

口語の敬語法

「おみ」 名詞の上に冠することあり。

おあいにく	お元気
おたつしや	おついで
おかはいさうに	お気の毒
おしづかに	おりっぱ

又形容詞の上に冠することあり。

一 おみ おほきくおなり遊ばしました。

「ご」 名詞の上に冠す。主として漢語のものにつく。

ご当人	ご老人	ご老体	ご返礼
ご相談	ご遠慮	ご論	ご注意
ご縁	ご機嫌	ご奮発	ご褒美

副詞の上に冠するもの。これも主に漢語のものにつく。

一 ご親切 ご丈夫 ご盛ん ごゆっくり ご尤も

二、接尾辞にして敬意をあらはすものは次の如し。

「さま」 名詞代名詞に接す。

天子さま	神さま	仏さま	地藏さま
母さま	人さま	姉さま	叔父さま

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

副詞にも添ふることあり。

— いかさま

山本さま 秀吉さま 雪子さま 殿さま

あなたさま こなたさま どなたさま

こちらさま あちらさま どちらさま

「さん」 人に関する語に名詞にも代名詞にも添ふ。

叔父さん 叔母さん 兄さん 弟さん

姉さん 妹さん 浦島さん 高山さん

太郎さん 船頭さん 車屋さん 小僧さん

おまへさん あなたさん

「どの」 専ら人に関する名詞に添ふ。

大臣どの 大佐どの 太郎どの お松どの

「どの」 上の「どの」の訛にして専ら口語に用ゐる。

— 小僧どん 太郎どん

「がた」 専ら人に関する名詞に添ふ。

— 宮様がた 先生がた 華族がた あなたがた 君がた おまへがた

「くん」 人に関する名詞に添ふ。

— 高山くん 太郎くん

口語の敬語法

「ご」 人に関する名詞に添ふ。但し、次の如くすべて他人の親属をさす時に用ゐる例のみを見る。

父^ご 母^ご 姉^ご 妹^ご
むすめ^ご

三、上に「お」又は「ご」を冠し、下に「さま」「さん」をつくるものあり。

「お——さま」 この形のもは人をあらはす名詞又は副詞にあらはる。
名詞に於けるもの。

お嬢さま おとうさま おかあさま
お菊さま お医者さま おあねさま

副詞に於けるもの。

おあいにくさま おまちどほさま
お気の毒さま お粗末さま

「ご——さま」 この形のものも人をあらはす名詞又は副詞にあらはる。但それらの語はいづれも漢字の音を以てするものに限る。

名詞にあらはるるもの。

ご尊父さま ご隠居さま
ご新造さま

副詞に於けるもの。

ご退屈さま ご親切さま ご苦勞さま

四、上に「お」を冠して、下に「さん」「どの」「どん」を添へたるもの。これはいつも人に関する名詞にあらはる。

る。

「お——さん」

—— おとうさん||| おかあさん||| おちいさん||| おばあさん|||
お子さん||| おむすめさん||| おうめさん|||

「お——どの」

—— お松どの|||

「お——どん」

—— お竹どん|||

第二項 体言の敬語

名詞の敬語にはその成立より見れば、二種あり。一は成立のはじめより敬意を含めるものにして、一はさもなく

名詞に接辞を加へて敬意をあらはすものなり。成立のはじめより敬意を含めるものは次の如き語をいふなり。

—— 仰せ 思召し

—— 拝謁 参上

さもなく名詞に接辞を加へて敬意をあらはすものとは次の如きものをさすなり。

—— お年 お役 お手紙 お火鉢 お金 お念仏
ご相談 ご老人 ご近所 ご返礼
伯父さま 太郎さん 田中くん 大尉どの

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

口語の敬語法

—— お娘さま ご尊父さま お子さん お花どの お松どん
おみ足 おみ帯

名詞の敬語はその性質によりて、謙称と敬称とに分ち、敬称を更に対称の敬称と一般の敬称とに分つことは前章に概説せり。然れども敬称中の対称の敬称の区別を為すことは口語にては候文の如くに著しからず。今口語に於けるこれらの敬語を類別して次に示すべし。

謙称の例。

—— おやぢ やど 家内 せがれ

対称の敬称の例。

—— 旦那様 奥様

以上の外の敬語は大体すべて一般の敬称なれば、一々例をあげず。

代名詞にて特に敬語と認むべきものは「あなた」「どなた」「どなた」なり。「あなた」は元来第三人称の方向をさす遠称の語なるを第二人称に転用したるものなるが、それと同時に尊敬の意をもあらはせるものなり。この「あなた」は音をくづして「あんた」と呼ぶことあり。その時は敬意稍少しとす。

「どなた」は第三人称の方向の不定称の語なるを人の不定称に転用し、同時に敬意をあらはしたるものなり。

以上の外「このかた」「そのかた」「あのかた」「どのかた」といふ語を用ゐて人の第三人称とすることあり。これらも亦同時に尊敬の意をあらはすものなり。

上の「あなた」「このかた」「そのかた」「あのかた」「どなた」「どのかた」等に接辞「さま」を加へて一層の敬意をあらはすことあり。

「おまへ」といふ語は第二人称として用ゐらるるものなるが、接辞「さま」を加へ添へて「おまへさま」といひ

て敬意をあらはすことあり。又「おまへさん」といひて少しく敬意をあらはすに用ゐることあり。「あなた」のくづれたる「あんた」といへるに「さん」を添へて「あんたさん」といふことあり。これ「おまへさん」の程度に似たる語づかひなり。

第二人称にいふ「君」といふ語は本来名詞なるを今は普通に代名詞の如くに軽く用ゐるものなるが、これにも多少の敬意を存するものなり。

第一人称の「私」「僕」などは本来名詞の謙称なるものなるが慣用久しくして敬意なきが如くになりたれど、なほ多少本来の性質を保存するものなり。「手前」といふも亦謙称なり。^{（まへ）}代名詞の方向を示すものに「さま」を添へて敬称とすることあり。その例。

— こちらさま あちらさま

数詞にては「お」を冠らせて用ゐることあり。

——	お一つ	お二つ	お十三（これらは主として年齢にいふ。）
	おいくつ	おいくら	おいくたり
	おいく筋	おいく樽	おいく棹

第三項 形容詞の敬語

口語に於いて敬語の最もよく発達したるは用言にあり。これにつきては形容詞と動詞と存在詞とに分ちて説くべし。

形容詞の敬語はすべて接頭辞「お」を冠してのみつくらる。その例。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

口語の敬語法

・お早う。

・お早いはうがおよろしうございます。

・お心安くねがひます。

・お心安い方にお出でを願つて……

・新年おめでたう。

・おめでたい事やたのしさうな事が書いてあります。

・お珍しいお品をいただきましてありがとうございます。

・殿はまだお若くてこれから功名をお立てになる折はいくらもございます。

かくて、これらの「お」を冠したる形容詞は多くの場合に連用形としてあらはるものなれど、又連体形としてもあらはれ、未然形、已然形の如きは用ゐぬにはあらねど、用例は稀なりとす。

未然形の例。

— およろしくばいくらでも。

連用形の例。上に多く例をあげたり。なほ次にもあぐ。

・この頃はよほどお寒くなりました。

・そんなにお弱くもないのに今年はどうしたのでせう。

終止形の例。

・兎に角只今ではあなたはあらゆるお役やら委員会やらでお忙しい。

・おなつかしや母様。

連体形の例。

已然形の例。

- ・取分けおいそがしい中を一週間もおひまをいただきましてまことにありがたうございます。
- ・あなたはお情深いお方ですから後にはきつとおえらくおなりになります。
- ・それはまことにおなごりをしい事でございます。
- ・それはさうと、今日はさぞお嬉しいでせうね。
- ・あちらは大層お涼しいさうでございます。
- ・そんなにおわるいとは知らなかつた。

- そんな事でおよろしければ何とでも致します。

これらの敬語は敬意をあらはすこと、勿論なれど、用法上よりみれば敬称なるあり、謙称なるあり。而して、そのうちにも敬称なるは極めて多く謙称なるは少しとす。上の諸例は即ち大多数が敬称にして、謙称なるものは次の例の如きもの少しく存するに止まる。

- ・それはまことにおなごりをしい事でございます。
- ・実におはつかしい事でございます。
- ・おしたはしう存じます。

第四項 敬意の複語尾

動詞存在詞には敬意の複語尾をつけて敬語をつくること少からず。この場合に用ゐらるる複語尾は「れる」「られる」「二を主とし、又「せる」「させる」をつけて用ゐることあり。

「れる」「られる」を用ゐたる例。

- 先生のいはれる通りでございます。

口語の敬語法

・もう来られる頃だ。

・なかなかよく書かれる。

・休まずに勤められる。

・りっぱな着物をきられる。

・講釈せられる。

・いつも元氣な大木先生は目方を掛けながら、時々じやうだんを言つてをられる。

これは右の如く「れる」は四段に、「られる」は一段三段に属し、いづれも動詞の未然形に属するものなるが、左行三段活用動詞にはその連用形にもつくことあり。

— 講釈しられる。

さて又この「せられる」「しられる」を約めて「される」といふことあり。この時は多くは二字にてなる漢語につく。時には漢字一字にてなる語にもつくことあり。

・講釈される。

・勉強される。

・訳される。

この複語尾はその活用形動詞の如く完全にして諸種の語法をあらはし、又その活用形よりそれゝ所属の複語尾を伴うことあり。

未然形の例。

・あなたは我我の一行には加はられなかつたのですね。

・御酒はのまれまいと思ひます。

・その身なりといへばただ着流しで馬にはもとより車にも召してあられない。

— 此の大雪にまだ遠くは行かれまい。
連用形の例。

・東京の御内でも困つてをられます。
・左様さ、少し太られたかな。
・ほんとうともいはれ、うそともいはれますのです。
・昨日も来られ、今日も来られました。
・僕のお兄様は浮間が原へ遠足にいつて桜草をたくさんとつかへられました。
・白髯の老将軍が白い遅しい馬に跨つて通りに出られ、間もなく黒い服を着た先生が女生徒を一人つれてはいつて来られた。

終止形の例。

・お嬢さんは立ち止まつておられる。
・さすがの大西郷も困り果てて門のかたはらにたたずんでおられるとをりよく向ふから岩倉公の馬車が勢よくやつて来た。
・父は五十の坂を越した白髪交りの老人で常に「人は正直が何より大切だ」と口癖のやうにいはれる。

連体形の例。

・着物を着替へると云はれるから一寸それを待つてゐただけです。
・毎日のやうに創見を出して開拓して行く先生が實際今の学术界を維持してゐられるのだ。
・大西郷が陸軍大将として東京につとめてゐられる頃のことであつた。
・もし君も一しよに行かれるならばどんなに愉快でせう。
・それはあなたがどう思つてゐられるにしろあなたの御勝手ですがな。

已然形の例。

- ・あの方が手を引かれればもう致し方がありません。
- ・私の方へも来られれば、兄の方へもよくおいでになります。

命令形の例。

- ・神様のお恵で達者で居られい。
- ・しごとなされよ。きりくしやんと、かけた襷のきれるほど。

これらの複語尾は敬語の動詞に附属して一層の敬意をあらはすに用ゐることあり。

- ・神のみすゑの天皇陛下われら国民七千万をわが子のやうにおぼしめされる。
- ・これはめづらしいものだと仰せられた。
- ・母上様には本月二日から例の御病気で昨今は何もめしあがられず、一同心配してゐます。

「せる」「させる」の未然形も亦敬意の複語尾として用ゐらるることあり。こは元來文語の敬語なるを転用したるものなるが、その未然形のみ用ゐられ、しかも下に必ず「られる」の附属せる場合のみなりとす。

- ・くれぐれも御嘆のあまり御病氣に罹らせられないやう祈ります。
- ・日頃御孝心深い御事とて御心残はあらせられませう。

以上敬意の複語尾を伴へる語はすべて敬称として用ゐらるるものなり。

第五項 動詞の敬語

動詞の敬語はその成立上より見れば二種あり。第一は成立のはじめより敬意を含めるものにして、第二は普通の動詞が敬意の複語尾をふむによつて敬語となるものなり。ここには主として本来よりの敬語なるものにつきて述べし。

動詞の敬語はその称格よりして謙称と敬称との二種に大別す。
謙称の動詞と目すべき語は大略次の通りなり。

———
まうす (言ふ)

いたす つかまつる (する)

いただく (もらふ、食ふ、飲む)

あがる (訪問す、行く)

まゐる (行く、来) (成る)

うかがう (聞く、たづぬ、その人の家許に行く)

うけたまはる (聞く)

———
以上は四段活用 of 語なり。

あげる さしあげる (やる、与ふ)

まうしあげる (言ふ)

———
罷り出でる (行く)

———
以上は下一段活用 of 語なり。

ぞんずる (知る、思ふ)

進上する 進呈する (与ふ)

参上する (行く)

頂戴する 拝領する (もらふ)

———
拝借する (借る)

———
以上は左行三段活用 of 語なるが、この外に敬意の漢語を用ゐてこの謙称動詞を作ることを得るなり。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

口語の敬語法

以上の各語はいづれも下の括弧内に示したる如き意味を以ての謙称となるものなり。而してこれらのうち意義の上より考ふれば、

—— まうす。 いたす。 まゐる。 つかまつる。 うけたまはる。 かしこまる。
罷りいでる。 存ずる。

等は謙称を用ゐる者の作用につきて絶対的に用ゐるものにして、

—— いただく。 あがる。 うかがう。 あげる。
さしあげる。 進上する。 参上する。 頂戴する。

等は、謙称を用ゐる者の、尊敬すべきものに対しての行動につきていふものなり。されば、甲を絶対謙称といふことを得ば、乙は関係謙称といふことを得べきなり。

「まうす」の例。

- ・土曜にはおたづね申します。
- ・先生の方へは僕から御断りを申しませう。
- ・いらつしやることにしてお待申してをります。

「いたす」の例。

- ・このまま切腹を命ぜられても石田めと中直りはいたさぬ。
- ・あまり長くなりますからまうおいとまにいたします。
- ・一夕晚餐を御一緒にいたしたいと存じます。

「つかまつる」の例。

- ・どうつかまつりました。

— 御食事のお相伴をつかまつります。

「いただく」の例。

- これがすむと家へかへつておやつをいただく。
- それはきれいだらうからみせていただけ。
- 失礼ながらお名前を聞かせて頂きたい。
- それは姉さんからお正月にお年玉としていただいたのである。

「あがる」の例。

- 加藤先生の御宅に暑中見舞にあがりました。
- 私もこの次の日曜日にはぜひ御見舞にあがらうと思つて居ます。

「まゐる」の例。

- それでは今度も宅でお泊り下さるわけには参らない。
- 何しにここへ参つた。
- 緊急を要する事件も此頃は少しも起つてまゐりませぬ。
- 今月二十日すぎにまゐります。
- だんだん寒くなつてまゐりました。

「うかがふ」の例。

- みんな有難いお言葉だ、おろそかにうかがつてはならぬ。
- おとうさんにうかがつたらかもめだとおつしやつた。
- 昨日修身の時間に先生から次のお話を伺ひました。
- とくに御機嫌をうかがひたいと思つて居ましたが、忙しい為に思はず失礼いたしました。

口語の敬語法

「うけたまはる」の例。

・それでも今度はこちらへ伺ふのが容易な事ではなかつたですよ。

「あげる」の例。

・昨日友人から承りますれば君は小学校を優等で御卒業なされたさうで誠におめでたい事でございます。
・明晩参上しまして、之に関するお考へを承りたいと思ます。

・せみを百びきとつたらごほうびをあげる。
・私があやしてあげるとみよちゃんのはかはい顔をして小さい手をだしてうまくと云ひます。
・それにはちゃんと三銭の切手のはつてあるのに、なぜまたおあしを上げるのですか。
・一つはお前におくつて上げよう。

「さしあげる」の例。

・開店祝として粗酒一献差上げたうございます。
・なお明日は小生よんどころないさしつかへがありますので舎弟兩人を名代として御送りにさしあげるつもりでございます。

「まうしあげる」の例。

・これから後やまとおぐなの皇子を日本武尊と申し上げるようになりました。
・皆様御機嫌ですか、御案じ申し上げてをります。
・くはしい事はお目にかゝつてゆつくり申し上げます。

「罷り出でる」の例。

・いづれ自身に罷り出まして御話を伺ひませう。

「存ずる」「進上する」「呈上する」等の例。

- ・今にはじめぬ伯母様の御心添身にしみて忝く存じます。
- ・いささか御礼の印までに呈上します。
- ・私はこの雑誌ははじめて拝見しますが大そうおもしろくできてをります。
- ・よろしい承知した。
- ・御邪魔になると思つてわざと見舞に参上しない。
- ・それではここで失敬します。
- ・存じません。

敬称の動詞と目すべき語は大略次の通りなり。

めす	(呼ぶ、着る、穿く、乗る、買う)
おぼしめす	(思ふ)
あがる	めしあがる (食ふ、飲む)
あそぼす	なさる (為)
くださる	(与ふ)
いらつしやる	(来る、行く)(居る)
おつしやる	(言ふ)

以上四段活用の語なり。而していづれも下の括弧内に示したる如き意を以ての敬称をあらはすなり。

右のうち「なさる」「くださる」は「なす」「くだす」に敬意の複語尾「す」のつきたるもの、「いらつしやる」は文語の「いらせらる」にして「いる」に敬意の複語尾の「す」と「らる」とのつけるもの、「おつしやる」は文語の「仰せらる」にして「仰す」に敬意の複語尾「らる」のつけるものにして本来は下二段活用をすべき筈のものなるが、口語にては各一の独立の動詞として用ゐられ、活用も又かはりて四段となれるなり。

口語の敬語法

以上の敬称の動詞はその敬称の起る対象につきて考ふれば二様の区別あるを見る。一は、

めす おぼしめす

あがる めしあがる

あそぼす くださる

いらつしやる おつしやる

の類にしてこれらはいづれも尊敬すべき対象の作用を絶対的にいひあらはしたるものなるを以て絶対敬称といふを得べく、一は、

— くださる

にして、これは尊敬すべき対象がその敬称の語を使用するものに対して起す作用につきていへるものなれば関係敬称といふべきものなり。

「めす」の例。

- ・あなた様にもその良い馬にめしめて御主人の御目にとまるやうになさいます。
- ・その身なりといへばただ着流しで馬にはもとより車にも召してあられない。
- ・まう今晚はお湯は召しませんでございませうか。
- ・どうぞこの寝間着を召して下さいませ。

「おぼしめす」の例。

- ・これはめづらしいつるぎだ、自分の物にしてはならぬとおぼしめして天照大神へお上げになりました。
- ・玄海の大洋を見はらし給うて海面を吹き来る風を心地よく思召されたのであらう。

「あがる」の例。

「めしあがる」の例。

- ・御飯をおあがりになりましたか。
- ・どうかおあがりなさって下さい。
- ・あの、ポルト酒は白をあがりますでせうか、黒をあがりますでせうか。

「あそぼす」の例。

- ・皆さんは白酒をめしあがつてぽつとおなりになりました。
- ・召しあがつたら是非その名をつけて下さい。
- ・おこしはすぐめしあがつて下さい。
- ・さあ皆さん十分に召し上げ。

「なさる」の例。

- ・あなたはかやうにあそぼせ。
- ・陛下の厚い大御心により祝賀の御式は十月と遊ばされたのである。

「くださる」の例。

- ・地蔵様でも悪い事をなさつたと見える。
- ・神功皇后が新羅を伐たうとなされた時、この玉島の里にいでまして、この小川のほとりで御食事をなされた事があつた。
- ・はやくおなほりなされて学校にお出でなさるやうまつてをります。

・私は早くかあさまの御病気がよくなつてとこをあげ、とうさまが長崎からかへつて下さればよいなと思つてゐます。

・これを見て下され。

口語の敬語法

「いらつしやる」の例。

- ・ 其のいはれで戦争の時大きな手柄を立てた軍人に下さる勲章に金の鵞をおつけになつたのだ。
- ・ おぢいさんは大へん私をかいがつて下さつた。
- ・ 本当にはがき一つでも下さればいいのにね。

・ 地蔵様が縄にかかつていらつしやる。

- ・ しかし私と御母様と楽しく暮す此の家は御父様がいらつしやらなくても春が来れば香ゆかしい梅も咲きます。
- ・ どちらへいらつしやいますか。

・ おかあさんはあすこに入らつしやるよ。

- ・ ふと気がつくと校長先生と山田先生とが箱のそばへ来て面白さうに僕等の仕事を見ていらつしやつた。

「おつしやる」の例。

・ お薬はお医者様のおつしやる通りにしてのまなければなりません。

- ・ それはあなたが宜しいと仰つしやれば私も申しますは。

・ やつぱりにいさんの仰つしやつたやうに星の位置はかかりますね。

- ・ そんなに書けて先生はおつしやらなかつたもの。

以上は意義の上の穿鑿を主としたるものにして不必要なるにはあらねど、文法上より見れば、これらのうちにつきて更に必要な点を指摘すべきものあり。即ち謙称の諸語中「まうす」「いたす」「つかまつる」「まうしあげる」の四語は「する」の敬語にあたる用をなすものにしてその用法は他の諸語とは異にして特別な用法をなす点あり。敬称の動詞につきてはこれらの点はなほ精細に研究すべき点あり。即ち以上の敬称の動詞中、

— めす おぼしめす あがる めしあがる

の類は生得の動詞にして更にその下に「あそぼす」「なさる」「くださる」をつくることを得るものにして、他の

— いらつしやる おつしやる

は下に「あそばす」等をつくることなきものなり。かくて又その、

— あそばす なさる くださる

の三語は「する」の敬語にあたる用をなすものとして、他の動詞の連用形又は動詞の素たる漢語につきて敬称の動詞を構成する用をなし、

— いらつしやる

は存在詞「ある」の敬語にあたる用をなすことあるものにして、文法上の関係より見れば、同じ敬語動詞といへどもかく四様の区別あるを見るなり。

以上敬語の各動詞は又その下に補助動詞「ます」を添へて用ゐらるること多し。

第六項 存在詞の敬語

存在詞に於ける敬語は謙称としては「です」「ござる」「ございます」といふ三語を用ゐ、敬称としては「いらつしやる」といふ語を或る場合に用ゐる。

「です」は陳述の力をあらはす語にして次の如くに用ゐらるるものなり。

・ ひどい暑です。

・ おとしはおいくつです。

・ 少しも分らないのです。

・ 朝の内はお天気でせう。

・ ぢぎにかへりますでせう。

・ もつとあるのでせう。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

口語の敬語法

これによりて見ればその活用形は、

- ・ほんとに可愛い赤さんでした。
- ・昔の友人がたづねて来たのでした。
- ・まことにお氣の毒でした。
- ・あなたのもつてゐらつしやる秀吉の本がおあきでしたらどうかしばらくの間おかし下さいませんか。

未然形	連用形	終止形	連体形
でせ(ウ)	でし(タ)	です	です

の四あることを知る。然れども、これらはその活用形の用法頗る制限ありて、一般の用言の如くに自由ならず。先づ未然形は「でせう」の形以外のものを見ず。

- ・先生はいつたい何をおかひになりたいのでせうね。
- ・無論取次は故障なしに這入らせるでせう。

連用形は「でした」の外「でして」といふ形のみを見る。

- ・実はあれが旅に立つさうでして。
- ・みな支那でできるのでして日本では出来ませぬ。

終止形は「です」といひて終止する外、次の如く助詞に連ぬるものを見る。

- ・大変な暑さですね。
- ・それにしても皆さんはよくおよつていらつしやいましたのね。私もですけれど。

連体形の例。

- ・御病氣はいかがですか。

- ・も少し下に行くとそのつち岸に流れ寄るですよ。
- ・十銭だけかつて下さい、まけておきます。見切物ですから。
- ・ほんとうに兄さんは嬉しさですこと。
- ・どういたしまして正札ですもの。

・手跡の美しいのは奥床しいものですが、誤字のあるのは見苦しいものです。

「です」は実際に用ゐらるるには必ず賓格を伴う。その賓格の詳細は次節に説くべし。

「いざる」は古く「おはす」といふ敬語ありしを漢語にて「御座」とかきしに「ある」を添へたるものが、何つしか一語に熟成したものと見ゆ。これも亦「ある」の謙称にして次の如く用ゐらるるなり。一方にては、「在る」の意をあらはし、一方にはただ陳述の力のみあらはす。

「在る」「居る」の意なるものの例。

- ・ここにこんな妙な物がござる。
- ・それならばお帰り迄儀式を延す迄の事は左迄難くもござるま。

陳述の力のみをあらはしたるものの例。

- ・小生が西郷吉之助でござる。
- ・さやうでござる。

この時には必ず「で」といふ格助詞を伴ふものなり。

「いざる」はその活用四段活用なるものなり。然れども今は「いざる」の外連用形のみ用ゐらるるが如し。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
いざり	いざり	いざる	いざる	いざれ	いざれ

いの「いざる」の単独に用ゐらるるものは次の、

口語の敬語法

一・天川屋儀平は男で「やね」。

の如きものなるが、かくの如きは現代の語にはあらずして、稀に用ゐるものありとしてもそれは擬古のものなり。現代の口語としては下に必ず「ます」を加へて用ゐらる。

「ござります」の用例。

- ・不思議な利目がござります。
- ・それは机の引出の中にござりませう。
- ・先生、それは冗談でござりませう。
- ・あれでようござりましたかな。
- ・それはこの人のおかげでござります。
- ・さやうでござります。

この「ござります」は多くは「ございます」として用ゐらるることあり。その事は次の「ます」の条下に詳説すべし。

「いらつしやる」は「入らせらる」の約転なるが、それは普通の敬語動詞としては「来る」「行く」「居る」の意あるものなるが、時として陳述の力のみあらはすことあり。而して敬称の性質はこの場合にも依然として存するなり。なほこの場合にはその「で」動詞の助けたる資格を伴ひてあらはるるなり。

「いらつしやる」の例。

- ・あなたはどなたでいらつしやる。
- ・御存知でいらつしやいますか。

「いらつしやる」が「ます」につくときは「いらつしやいます」となる。この事は次の「ます」の条下に詳説すべし。

第七項 補助動詞「ます」

「ます」は極めて汎き用法ある謙称の動詞にして、独立しては用ゐらることなく、必ず動詞又は存在詞の下につきてその陳述を助くる用をなす。この故にこの語はその意義よりいへば敬語といふべきものなれどもその性質及び用法よりいへば、補助動詞といふべし。今これを別項として説く所以は実にその性質用法の上より見ての事にしてこれを他の敬語と同一列に説くときは錯雑に流れてかへりて「ます」の眞の研究を害する惧あるを以てなり。而してこの「ます」は、現代の口語として多くの敬意を含む場合には用言毎に殆ど必ずつくる如き勢に立てるものにして、さなき場合にても一の陳述は必ず「ます」に終るといひても差支なき程の現象を呈せり。実に現代の口語は「ます」の全盛期といひて可なる如く見え、若し「候文」といふ名目に対して新に命名せば、現代の口語は「ますことば」といひてもよかるべし。なほその用法を見るに謙称たることは勿論ながら、敬称にても謙称にてもすべて他の用言に附屬してそれらを補助して陳述の力を添ふる点はこれが補助動詞といふべき性質を有すといふに十分なりとす。

「ます」の活用は次の例の如し。

- ・あちらの方へ行つてみませう。
- ・花が咲きました。
- ・かなり高く飛びます。
- ・常より早く運びます。
- ・これが御奉公だと思ひますれば少しも寒くはございません。
- ・どうしますれば宜しうございませう。
- ・どうぞこちらへ御出なさいませ。

これにて明なる如く、この動詞は、

SAMPLE
Shoshi-Shinshu.com

口語の敬語法

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ませ(ヌ)	まし(タ)	ます	まする	ますれ	ませ

の形をなせば、まさに左行三段活用をなすものと知られたり。而してこの語はその各活用形は大体普通の動詞の如く使用せらる。次にその用例の一斑をあぐべし。

未然形の例。

- ・あまり遅くならないうちにまう一まはりして来てもらひませう。
- ・どうすれば文がうまくなりませうか。
- ・私はこの頃つまらなくてくたまりませぬ。
- ・あなたと御別れ後はくはしいおたよりもいたしませずまことにしつれいいたしました。
- ・枯木に花をさかせませう。

連用形の例。

- ・ほんに不躰な事を申しまして宅でも申しわけがないと申してをりますのでございます。
- ・音楽室の装飾をまうそろく始めましても宜しうございますか。
- ・実は先生に伺ひたい事がありまして参りました。
- ・私は心にうかぶまを三頁ばかりかきました。
- ・よくおるすゐをしましたね。

終止形の例。

- ・この頃はそれを一ぱんたのしみにしてゐます。
- ・僕はあしたまでに越してしまひます。
- ・僕はけふはお暇をします。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

・我儘を申し出しますと誰が何と申しても聞きません。

・人には各（おのづか）分限といふものがありますし又程度といふものもあります。

・先生ごかい（誤解）とはどうかきますか。

・さあよみますよ。

・当分あなたの所に置いて下さるわけには行きますまいか。

・君はどうしてゐますか。

・なに教師をしてゐると人名や地名の説明を求められますから此本がないと心細いのです。

この終止形には文語の連体形に附属すべき助詞「か」「よ」などの接すること上例の如し。
連体形の例。

・併（ひび）しかうなつて見ますれば宅がどうにでも跡仕末を付けます。

・へい、一生の御願でござりまする。

・わたくしもさやうかと存じまする。

この連体形は文語の系統を保存するものにして実用上は終止する外に「の」「は」の助詞等をつけて終止するを普通とす。この故に、この連体形と終止形とは新古によりて存在する並立の形にして、用法上の分化に基づきて存するにあらざるなり。

已然形の例。

・私がまゐりますればきつと内に居ないといひました。

・このお話が旨く運んで娘をあなたのやうな方に托することが出来れば安心ですが。

・順序を申しますれば第一に己れの身を修め、次に一家をととのへ次に財産を処理することになります。

この「ます」は上にいへる如く、汎く用ゐらるるものなるが、その用例は次節に説くべし。

第八項 副詞の敬語

副詞にて敬語のあらはるるは情態の副詞のみにして、それらはいづれも敬意の接頭辞「お」「ご」を冠したるものにして随つて皆敬称たるなり。

本来の国語なる情態副詞における例。

- ・まことにおあいにくさま。
- ・お待遠さまです。
- ・ご尤でございます。

漢語より来れる情態副詞における例。

- ・いつもおたつしやで結構な事であります。
- ・ごたいくつさまです。
- ・ご親切にありがたうございます。
- ・ご面倒にはございませうが宜しく御願ひします。
- ・まことに御苦勞様です。

これらの用法は主として修飾格に立つものなれど、又「な」といふ存在詞の資格に立つことあり。それらは次節に説くべし。

第二節 連語に於ける敬語

第一項 補助動詞「ます」の用法

「ます」の性質は前項に説ける如く全く補助にのみ用ゐられて独立に用ゐらることなし。その用法の如きは、動

詞存在詞のすべてに附属してそれにつきて敬意をあらはすと共に陳述の力を添ふるものなり。而してこれが本義は謙称に存するものなれど、敬称の用言をも助けてその陳述に一層の敬意を加ふる用をなす。次にその用例を分ち示すべし。

通常の動詞を受けたるものの例。

四段活用 of 動詞を受けたるもの。

- ・私はきのふふろしきを持つてお使に行きました。
- ・この太い足でどさりくと歩きます。
- ・さあ行きませう。
- ・綱をつけなくてもよそへは行きませぬ。
- ・私は渡場へかへつて人を渡します。
- ・人が鉄砲で一度に三羽うち落しました。
- ・どちらも負けずに戦ひましたが、とうとう頼光が勝ちました。
- ・それからこの人の田にはお米が少しも出来なくなつたといひます。
- ・国人は一般に海軍を重んじ、海軍士官を貴びます。
- ・わにざめは白兎のいふ通りにならびました。
- ・お礼に舞をまひませう。
- ・それがなか／＼うまいもので私たちもよく取つて飲みます。
- ・山はけはしく道はわかりませぬでしたがとう／＼たづねあててとめてくれとたのみました。
- ・何で命を惜みませう。
- ・五ツになります。
- ・矢はうまくあたりました。
- ・来年もやはりあの稲を作りませう。

口語の敬語法

上一段活用の動詞を受けたるもの。

一・お薬はお医者様のおつしやる通りにして飲まなければなりませぬ。

・おかげで天へかへることが出来ませぬ。

・新道の両側には新しい家が七八軒できました。

・楽器があつても手が無かつたら面白い音を出すことは出来ませぬ。

・押し出された鉛筆はぐる／＼廻つてゐる革帯の上に落ちます。

・御手紙はみました。

・さがしてみませう。

・きものをぬいで下へとびおります。

・きかないで射ました。

・この箱の中にももしろい人がゐます。

・此の間も十ぐらゐの少女が君が代をうたつてゐました。

下一段活用の動詞を受けたるもの。

・それからそれへと細い根をひろげます。

・弁慶が大雑刀できりつけました。

・お別れのしるしにこの玉手箱をあげませう。

・ごせいが出ますね。

・この二三日の雨で竹の子がこんなに出ました。

・門松をたてます。

・夕飯がすんだ後でおぢいさんが二郎にたづねました。

・夕飯は大抵六時頃にたべます。

加行左行の三段活用 of 動詞を受けたるもの。

- ・ 何かきかれるとこの口ではつきり答へます。
- ・ 兄さんがお友達と庭に大きな雪達磨をこしらへました。
- ・ そんな時には進行を止めます。
- ・ 月が出はじめました。
- ・ 耳もよくきこえます。
- ・ けれども角は生えませぬ。
- ・ よいおちいさんは大さう悲がつて犬を埋めて、その上に小さな松の木を植ゑました。

受身可能使役の複語尾を有する動詞を受けたるもの。

- ・ 人がぼつ／＼たんぽからかへつて来ます。
- ・ ちよつとは離れますが、よく親牛の所へきます。
- ・ 東京のをちさんからお前の所へゑはがきが来ました。
- ・ 囀るだけさへづると今に下りてきませう。
- ・ 氏神様の森で朝から太鼓の音がします。
- ・ いづれ又近い中に便りをしませう。
- ・ なるほどよい考へだといつて皆が感心しました。
- ・ それは洪柿でまだ熟しませぬ。
- ・ 片方の足跡が一つ置きに浅くなつて居るので察しました。
- ・ 一番先に障子や唐紙が外へ出されました。
- ・ 第一竹の子がたべられます。
- ・ これを見るといろいろなことが思ひ出されます。

口語の敬語法

存在詞の「ある」を受くるものあり。この場合のものは存在をあらはすものにも陳述の力のみをあらはすものにもあらはる。

存在の「ある」を受けたるもの。

- ・こんな事ではどうして海国の民といはれませう。
- ・私はとても人の死ぬのをじつと見ては居られませぬ。
- ・たとひ金銀で作った弓でも、御命には代へられませぬ。
- ・かうのびてはとてもたべられませぬ。
- ・定めて御骨の折れることとは察せられます。けれども何分十分の御成功を祈ります。
- ・寡婦の手一つで中学三年まで通はせましたが力尽きて遂に退学させました。
- ・花さかぢぢい、枯木に花をさかせませう。
- ・まだ三人の子供が生き残つて居ますから、まう一度旗上をさせて、きつと賊を平げさせます。
- ・妻や子供に朝晩お念仏のかはりに御名を唱へさせます。
- ・夕方には私がつれて野みちをあるかせながら草をくはせませう。
- ・たのしみは一年中いつもあります。
- ・この山には栗の木が沢山あります。
- ・村はづれに水車があります。
- ・簞笥や葛籠から着物を出して風通しのよい処へかけてあります。
- ・まう人が拾つたのか、さつぱりありますぬ。
- ・有を有とし無を無とするに何の心配気兼ねがありません。
- ・この時にはまう目に涙がありがたせぬでした。
- ・昔々、よいおぢいさんとわるいおぢいさんがありました。

陳述の「ある」を受けたるもの。

- ・あれは私のものであります。
- ・私もお供するのであります。
- ・あの方は大学の先生でありました。
- ・中学教育に専心努力する所存であります。
- ・若し達磨大師にこの事を申したならば無功德と答へられるでありますう。
- ・だれも居るのではありません。
- ・それでも航海をする人などがよく是を見て船の位置をはかるといふではありませんか。
- ・あなたではありません。
- ・君は又信仰上の修養に不用意の人ではありませんでした。

「ます」は又敬語を受けて一層の敬意をあらはすことあり。この時には謙称の動詞にも敬称の動詞にも敬意をあらはす複語尾のつきたるものにも、又存在詞の敬語にもつきて敬意をあらはすなり。謙称の動詞を受けたるもの。

- ・ああはつかしい事を申しました。
- ・近所の人にきいても知らぬくと申します。
- ・家内がさう申しました。
- ・小学校とは大分勝手が違ふやうな気がいたします。
- ・なめて見ると酒のあぢがいたします。
- ・誰れにも頼まれはいたしません。
- ・今夜はこれをたいてあなたの御もてなしにいたしませう。
- ・ある年頼朝は日本中の侍を引きつれて富士の牧狩をいたしました。

口語の敬語法

- ・お受けつかまつります。
- ・みんないただきます。
- ・それは結構、いただきます。
- ・私は姉さんに雪で兎をこしらへていただきました。
- ・御注文をいただきありがとうございます。
- ・それではちよつと出かけてまいります。
- ・雀の子がほしくて参りました。
- ・だんな参りませう。
- ・私はこの新年を迎へると共に新しい望が出てまいりました。
- ・明日は必ず手紙がまいります。
- ・さういふ訳には参りません。
- ・白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、委しい事は今日始めてうかがひました。
- ・かしこまりました。
- ・私は毎日みよちゃんのおもりをしてあげます。
- ・それからは毎日其の酒をくんで来ておとうさんに上げました。
- ・お年玉には何をあげませう。
- ・ついでには此の中の金を半分だけお礼のしるしにさし上げます。
- ・そのうちにあつちいお茶を入れてさしあげました。
- ・いづれ改めて委しい事を申し上げます。
- ・白兎は目をこすつて又そのわけを申し上げます。
- ・どうお答へ申し上げますればよろしいございますか。
- ・明日はきつと罷り出でます。
- ・まことにありがたうぞんじます。

敬称の動詞を受けたるもの。

- ・私は少しも存じませぬ。
- ・此の品は輕少でございますが歳暮の印までに呈上します。
- ・貴族院はその薨去を追悼し、恭しく弔辭を呈します。
- ・宜しければ幾らでも進上させう。
- ・遠慮なく頂戴します。
- ・明後日参上させう。
- ・一寸これを拝借します。

- ・どうしますれば御氣に召させう。
- ・お出であそばさうと思しめますか。
- ・よくありがとうございます。
- ・よくめしありがとうございます。
- ・かやうにあそばします。
- ・その賞品がどんな人の手に落ちたと思召します。
- ・お休みあそばしました。

さて敬称の動詞中にも「なさる」「くださる」「いらつしやる」「おつしやる」より「ます」につづくる時は、

- ・こつちでお呼びなさりましたか。
- ・御免なさります。
- ・どうぞお任せくださります。
- ・あなたが私共の所へお出でくださりましたのが、私には心から嬉しうございます。
- ・恐れながらあなたが實際さやうでいらつしやります。

口語の敬語法

・どうぞうちへいらつしやりませ。

・それはきつとさうでないと仰つしやります。

・この為合がなくて好いとはどなたもおつしやりますまい。

・昨日はどうも実にあの方が私の胸に应へる様おつしやりました。

・はやくおつしやりませ。

といふを正しとするをその連用形の「り」をば「い」に転ぜさせて、

なさいます。

くださいます。

いらつしやいます。

おつしやいます。

といふ形にて使用するを通常とす。

「なさいます」の例。

・父はいつでもこんなお話をなさいます。

・ある夕食の後に父が次のやうな話をなさいました。

・いかがなさいましたか。

「くださいます」の例。

・少しも御案じ下さいませな。

・見事な初物をたくさん下さいまして有がたう存じます。

・その饅頭を一つくださいませぬか。

・戸棚から、うでた栗をお盆に一杯持つてきて下さいました。

「いらつしやいます」の例。

- ・先生はずんくお話をすゝめていらつしやいます。
- ・御遠方へいらつしやいますか。
- ・三時に近い頃二人いらつしやいました。
- ・君のお内では皆様がお達者でいらつしやいますか。
- ・よくいらつしやいました。
- ・御遊びにいらつしやいませぬか。

「おつしやいます」の例。

- ・何をおつしやいますか。
- ・銀の鈴だとおつしやいましたね。
- ・おかあさんに「いつひよつこが出ますか」とききますと「廿日ばかりたつと出ます」とおつしやいました。
- ・さう仰しやるのはどういふ意味でおつしやいますの。
- ・お嬢様にお目に掛りたいとおつしやいます。

敬意の複語尾のつけるものを受けたるもの。

- ・あの方もさやうに仰せられました。
- ・殿下、御機嫌うるはしくあられます。
- ・あの中には石の牢があつて唐糸様がおしこめられて居られます。
- ・大將も討死せられました。
- ・おとうさんは昨日分家の叔父さんと夜汽車で伊勢参宮に立たれました。
- ・某先生が貴族院議員に勅任せられましたたについて祝意を表したいと思ひます。
- ・当時のことを目の前を見るやうに話されました。

口語の敬語法

— 先生はもう来てゐられませうか。

存在詞の敬語の「ござる」を受けたるものも亦「^{へまぐ}ござります」といふべきを多くは「いざいます」といふことになれり。

「いざいます」の用例。

存在の意のもの。

- ・そこに学校がございます。
- ・まはりには大きな木が沢山ございます。
- ・其の横に畠がございます。
- ・私の家の庭はあまり広くはございませぬ。
- ・風味もなか／＼宜しうございます。
- ・一人で夕の食卓に向ふ人はどんなに淋しうございませう。
- ・楽しく面白いに違ひございませぬ。
- ・別に望みはございませぬが唐糸の身代りに立ちたうございます。
- ・浦島さん、この間はありがたうございました。
- ・大さうかるうございますね。
- ・おかあさん、お薬はにがうございますか。

陳述の意をあらはすもの。

- ・あれは栗の実でございます。
- ・あの方は聯隊長でございます。
- ・代表者は私でございます。
- ・あれは私のでございます。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

- ・この方にお任せするのでございます。
- ・時間が随分長いのでございました。
- ・お嬢様はお部屋で御勉強でございます。
- ・何よりの楽みでございます。
- ・さやうでございます。
- ・さうでございます。

- ・此品は軽少でございますが、歳暮の印までに差上げます。
- ・この夕の食卓を喜ばないものはないでございます。

第二項 賓格の敬語

すべて賓位觀念の欠けたる用言「する」「ある」「だ」「な」等に接してその賓位觀念として補充せらるるものを賓格といふ。

この賓格は述格と深き関係あるものなるが、その用言の觀念部を補充する語の位格を名づけたるなり。これは論理上の賓位を担任するものなればなり。

賓格の例。

- ・兄さんといつしよに勉強する。
- ・月は永久に人間の良友である。
- ・これも一興だ。
- ・それは容易でない。
- ・あすはもう五月の節句です。
- ・みごとな滝だ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsei.com